

「エクスプリマチュア・チャイルドの長期養護」に関する研究

分担研究者	日本大学小児科	馬	場	一	雄
研究協力者	東邦大学小児科	藤	井	と	し
	名古屋市立大学小児科	小	川	雄	之
	国立武蔵神経センター	有	馬	正	高
	愛知県心身障害者コロニー	高	橋	彰	彦
	国立精神衛生研究所	池	田	由	子
	伊豆通信病院	森	永	良	子
	国立長崎中央病院小児科	増	本		義

当研究班は、未熟出身児 *Expremature child* の追い上げ成長 *Catch up growth* に関する研究、行動学的研究および疾病に関する研究を目的とした。*Catch up growth* に関しては、その実態を解明し、成長・発達の評価基準を決定すること、養護、しつけ、教育面での *optimal stage* を決定したい。行動学的研究に関しては、未熟出身児を持つ家庭の親子関係、児の行動特性などを明らかにしたい。疾病に関する研究では、随伴する発達障害、好発する疾病の実態を明らかにし、新生児期の取り扱いに *feed back* する一方、健全育成の手段としたい。

今年度はそのうちで、各研究協力者により、未熟出身児の微細脳障害 (MBD) の後方視的周生期歴についての調査、ソフトサインの神経学的評価法を明らかにすることを目的とした粗大な障害例の分析、生育状況の調査のための病歴調査、未熟出身児 (超未熟児) の身体発育、未熟出身児の救命率および障害例の調査、未熟出身児をもつ育児態度、未熟出身児の被虐待児症候群、MBD、LD における未熟出身児の考察等についての研究が行なわれたのでその概要について報告する。

馬場は未熟出身児は発達障害ことに微細脳障害 (MBD) を随伴することが多いといわれており、未熟出身児で MBD と蓋診された 5 症例の周生期歴について調査した。その結果、この 5 症例において最も目立つ要因は 3 症例にみられた仮死と著明な呼吸窮迫の合併症状と 2 症例にみられた振戦を伴う低血糖症であり、またこれら 5 症例は出生体重 1,552g の 1 例をのぞきすべて極小未熟児であることを指摘している。

藤井は未熟出身児を出生体重別に 1967~1973 年の前期と 1974~1979 年の後期に分け、救命率および障害例を調査し、MBD と診断された児の症例について検討した。救命率は 1,000g 未満の児は前期 28.6%、後期 39.6% であり、1,000g 以上も後期には改善されている。脳性麻痺は体重の小さい群に多いという結果ではなく、1,000g 未満には 1 例、1,000~1,499g に 4 例、体重の大きい 2,000g 以上に 2 例みられた。MBD は 1,000g 未満には 0、1,000~1,499g の群に 2 例、1,500g 以上の群には 1 例づつで計 4 例であった。4 例中 2 例は母親が重症妊娠中毒症、SFD 児、新生児低血糖症であった。MD は各体重群にみられ、てんかんは体重の大きい群に 2 例みられ、RLF による高度の視力障害は 1,000g 未満に 1 例であった。

小川は超未熟児の身体的発育の基礎データに資する目的で、身長、体重、頭囲の経年的な発育について検討した。出生体重が 1,000g 以下の31例の未熟出身児の身体計測値については、4才半に至るまでは対照値に比して常に低値を示すが、1才半から2才時には身長、体重、頭囲ともに対照値との有意差は認められなくなり、超未熟児では1才半頃にはいわゆる Catch up growth が認められた。DQ/IQ の調査では80以下が6例に認められ、このうち2例はIQが70以下の明らかな精神薄弱児であった。

有馬は未熟出身児に多いとされる soft な神経学的徴候のうち、どのような点に重点を置いて検討すべきが明らかにするために未熟出身児にみられやすい粗大な障害を示す例について分析し、その障害が軽度な場合にどのような問題が残りやすいかを推定することにした。その結果、未熟出身児にみられる微細な脳障害について考える場合、粗大な脳障害の延長にある軽い器質的变化としてとらえると、その原因によって異なる配慮が必要であり、個々の項目を、運動、高次の大脳機能、精神行動面の問題に分類した場合、発達の段階に応じた変化の個体差とともに環境面についても分析が必要になることを指摘している。

高橋は未熟出身児の出生後の生育条件、母親の養育態度と児の発育状況の追跡調査を行うために対象児の選定とその病歴の調査を行った。

池田は精神衛生の立場から、未熟児を持つ母親の態度、反応、どの時期に不安がもっとも強く、いつまで続くか等に関して調査した。その結果は、母親のマイナス・イメージに結びついた未熟児の出生により、精神的に不安定になりやすく、さらに母子分離の体験は、母親の不安、疑惑、欲求不安を強め、子ども自身の弱さに対する罪悪感、挫折感をおこす可能性を示す一方、1才6カ月の時点では精神的平衡を回復している事実から、少なくとも健康管理等の積極的な働きかけがある場合には、児童の正常な発達が母親に好影響を与えるものといえる。

森永は MBD, LD における未熟出身児とくに SFD 児について考察した。LD, MBD 児76名中、未熟出身児は13名で、SFD 児は7名であったことは今後の LD, MBD 研究の上で大切な角度であり、SFD 児と学習能力障害との関係を検討する必要があることを指摘している。

増本は微細脳障害 (MBD) と新生児期の異常について検討し、出生体重 1,250g 以下の極小未熟児で、5~7才の35例の中で追跡し得た18例のうち、3例に MBD を認め、その新生児期の異常が低血糖症、低 Ca 血症、RDS、無呼吸発作であったことから、新生児期の代謝、体液異常、呼吸循環障害にもとづく栄養障害に考慮を要することを指摘した。さらに、未熟出身児の被虐待児症候群の双胎例について紹介し、新生児早期からの母子分離の影響および児を取り巻く家庭内の社会的問題について指摘した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



当研究班は、未熟出身児 Exprematuure child の追い上げ成長 Catch up growth に関する研究、行動学的研究および疾病に関する研究を目的とした。Catch up growth に関しては、その実態を解明し、成長、発達の評価基準を決定すること、養護、しつけ、教育面での optimal stage を決定したい。行動学的研究に関しては、未熟出身児を持つ家庭の親子関係、児の行動特性などを明らかにしたい。疾病に関する研究では、随伴する発達障害、好発する疾病の実態を明らかにし、新生児期の取り扱いに feed back する一方、健全育成の手段としたい。